

単元名「2Bわか山じょう公園たんけんたい」

1. 目的・目標・評価規準

学校の近くに立地している和歌山城公園の名所や自然、お店、人々との関わりを通して、子供たちが和歌山城公園での活動を楽しんだり没頭したりしながら、より身近なものとして感じられるようになって考えている。

本単元では、和歌山城公園の探検を通して、子供たちが公園内の名所や自然、お店、人々に親しみや愛着をもって関わろうとしたり、その過程で気付いた良さや面白さ、不思議さを表現したりできるようにしたい。また、子供たち一人一人の思いを大切にしたい学びと学級全体での協働的な学びを大切にしたい。

○和歌山城公園の探検を通して、公園内の名所や自然などの良さや面白さ、不思議さに気付いたり、和歌山城公園を様々な人々が関わり、支えていることに気付いたりしている。【知識・技能】

○和歌山城公園の探検を通して、和歌山城公園に関わる人々について考えたり、公園内の名所や自然などを自分たちなりの方法で良さや面白さを自分なりの方法で表したりしている。【思考・判断・表現】

○和歌山城公園の探検を通して、和歌山城公園に対して親しみや愛着をもち、楽しみながら関わろうとしている。
【主体的に学習に取り組む態度】

2. 教科の本質と教材について

生活科の本質は、子供たちが身近な人々や社会及び自然と繰り返し関わる中で、それらに没頭したり、好きになったりすることである。また、繰り返し関わる中で気付いたことや感じたこと、自分の思いや願いなどを、自分の言葉・絵・工作・身振り・劇化などから、自分のできる方法で表現できることである。そして、これらの活動を通して自立への基礎を養うものであると考える。

本単元では、和歌山城公園を学習材に取り上げ、子供たちはそこに関わる人々や社会及び自然と関わる活動を行っていく。和歌山城公園は、市街地であって多くの緑に囲まれ、植物や生き物についても学ぶことができる空間である。また、日本でも3か所しかないお城の動物園も動物の生態などを学ぶ価値のある場所である。さらに、和歌山城に関わる人々から学ぶ価値もある。和歌山城公園を大切に、愛する思い、ふるさと和歌山を盛り上げていきたいという熱意など、子供たちが和歌山城公園に興味をもち、活動に没頭し、好きになるきっかけも得られると考えている。

3. 子供の実態（抽出児）と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

本単元での学びを通して、子供たちは和歌山城公園の様々な良さや面白さ、不思議さを見付け、ハテナ（疑問）を解決しようと取り組むであろう。そして、これまで無自覚であったことを自覚することにより、何気なく訪れていた和歌山城公園の素敵などところや自慢できるところ、面白いところなどを実感し、自分自身が和歌山城公園での学習に没頭したり、より好きになったりするとともに、自信をもってそれらを他者に伝えようとする意欲につながるでると考える。これらの学習過程を経る中で、生徒エージェンシーの発揮につながる姿も引き出すことができるのではないかと考えている。

（抽出児）

A児・・・和歌山城公園内の様々な場所に興味・関心を示している。特に、自然豊かな庭園に興味を示し、ハテナを可決するとともに、よりその良さを感じようとしている。探検を通して感じた良さを、自信をもって他者に伝えるようになってほしい。

4. 本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

①学習対象と繰り返し関わりながら試行錯誤し、体験活動を充実

活動や体験は単発ではなく、何度も繰り返したり改善に向けて試行錯誤したりしていくことが大切である。そうすることで、事象との関わりは深まり、気付きの質を高めていく。毎回目的やめあて、見る視点を明確に定めて繰り返

し見学することにより、新たなことに気付いたり、さらに考えを深めたりすることができる。また、実際に何度も見学することを通して、子供が自分なりの和歌山城公園の魅力を見出すことにもつながると考えている。

②一人一人の多様性を活かす個別と協働の学習場面の設定

子供一人一人の思いや願いを大切にすることが重要である。それぞれの思いや願いに寄り添うことは、学習活動が多様に広がることにつながる。そのために、子供たちの活動の多様性を好意的に捉え、それを活かしながら豊かな学習活動へと高めていくことを意識したい。和歌山城公園の見学を通して、子供一人一人が興味をもったことについて調べたり考えたりすることで、主体的に学習を進めたり良さを感じたりすることができるのではないかと考えている。

そして、子供一人一人の気付きをみんなで共有し、高めていくことも学習を進めていく上で重要である。自分の気付きと友達の気付きを比べ、違いや共通点を見付ける。個別の学びだけでは得られない他の児童の学びや気付きから、自分の気付きや考えがより深まることにもつながると考えている。

③子供たちの学びを充実させる人との出会い

和歌山城公園には、公園を支えている人や公園を訪れる人など、多くの人が関わっている。子供たちが出会い、関わる方々は、和歌山城のことが好きで、とても熱い思いをもった方が多い。そこで、子供たちもよく訪れる和歌山城公園を大切に、子供たちに和歌山城に関する知識を情報として与えてくれるだけではなく、和歌山城を大切に、和歌山を盛り上げていくことに熱意をもって取り組むという、人としての生き方に惹かれる存在と出会わせたい。この出会いを通して、子供たちが取り組む活動へのモチベーションを上げることにつなげていきたい。

5. 学習の流れ（全 33 時間）

第1次 わか山じょう公園での思い出、楽しかったことを話し合おう（2時間）

わか山じょう公園での思い出や楽しかったこと、知っていることを話し合おう（2）【熊】

第2次 わか山じょう公園へたんけんに行こう（9時間）

たんけんに行こう（4）【熊】

気づきやはっ見をつたえ合おう（4）【知】【思】

もっと知りたい、調べたいところへ行くめあてを立てよう（1）【熊】

第3次 自分が行きたいところへたんけんに行こう（21時間）

もっと知りたい、聞きたいところへすてき見つけに行こう（5）

階段みたいな廊下（御橋廊下） 大きなクスノキ 伏虎像 天守閣 動物園 お店（お天守茶屋）
庭園 人型の木の根っこ おもてなし忍者 など

気づきやはっ見をふり返ろう、つたえ合おう（4）【知】【思】

わか山じょう公園のすてきを知ってもらおう（12）【熊】【思】（本時 6/12）

第4次 わか山じょう公園のたんけんをふり返ろう（2時間）

わか山じょう公園のたんけんを通して、気づいたことやせい長したことをふり返ろう（2）【思】

6. 本時の目標

- ・和歌山城公園の探検を通して発見したことやステキだと感じたことをより伝わるように工夫や試行錯誤をしながら制作を行っている。【思考・判断・表現】
- ・本時の活動内容を振り返り、次回の活動に向けた見通しをもっている。【主体的に学習に取り組む態度】

7. リフレクション

7. 1. 生徒エージェンシーの発揮を可能にするための3つの要素と本実践との関わり

本実践は、生徒エージェンシーの発揮を可能にするための3つの要素のうち、「①子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」を意識するとともに、「②他者と協働しながら自分自身の学習プロジェクトや学習過程を計画する一人一人にカスタマイズされた学習環境」を整えることで、本実践の目的を達成することができるのではないかと考え取り組んだ。

これらに迫ることができたかどうか振り返るために、本單元における教科の本質を味わうためのしかけが効果的であったかどうか、2人の抽出児の学びをもとに考察する。「子供たち一人一人が自分の情熱を燃やす」姿に迫れたかどうかについては、しかけ①「学習対象と繰り返し関わりながら試行錯誤する体験活動」ができたか、しかけ③「子供たちの学びを充実させる人との出会い」ができたかどうかを振り返る。「他者と協働しながら自分自身の学習プロジェクトや学習過程を計画する」姿に迫れたかどうかについては、しかけ②「一人一人の多様性を活かす個別と協働の学習場面の設定」ができたかどうかを振り返る。

7. 2. 3つのしかけと抽出児A児の学びの実際

抽出児A児は、最初の2回の探検を通して和歌山城公園内の様々な場所に興味・関心を示していた。その中でも、自然豊かな庭園に対して特に興味を示し、3回目の探検に向けて、公園内になぜ庭園があるのか、そして、その中になぜ橋があったり池の中に魚がいたり、通り道に石が敷かれていたりするのかといった、自分が見て率直に感じた疑問を解決したい思いが表れていた。

A児はこれらの疑問を解決するために、同じように庭園に関心をもっていたB児と3回目の探検に出かけた。紅葉溪庭園をじっと自分の目で見て、「橋が4個ぐらいある」ことや、「10mぐらいありそうな木」の存在に気付いたり、木に付いている葉っぱがきれいなことも感じたりしていた(図1)。

A児は今まで気付いていなかった紅葉溪庭園の魅力をより深めたいと思い、庭園の自然の「ステキ」を見付けるために、4回目の探検に出かけた。探検後の振り返りでは、「自然がある。岩があって、川、花などいろんなステキがいっぱい。紅葉溪庭園は私のお気に入りの場所。特に大好きな場所は入り口を通過してすぐそこにある大きなみずうみ。あの場所には木もたくさんある。水色のみずうみと木の組み合わせがキレイだと思う。写真で撮るともっとキレイに！そんなところが大好きでいつかそんな場所がいっぱい増えてほしい。」と紅葉溪庭園をとっても気に入る、その魅力を自分だけではなく他者へ発信したい思いへとつながっていった。

このように、和歌山城公園への探検を繰り返し行いながら、その都度めあてをもって関わることで、A児にとって体験活動が充実したものとなり、3つの要素のうちの、「①自分の情熱を燃やししながら」学ぶことができたのではないかと考える。ただ、單元の中で和歌山城公園に関わる人と出会い、子供たちが探検をしても分からないことを教えてもらうことができたなど成果はあったものの、子供たちの單元全体の学びを通して「①自分の情熱を燃やししながら」学び続ける関わりとしては、効果は薄かったと感じている。むしろ、学習対象との繰り返しの関わりだけでも、子供たちの学び続ける情熱が燃え続けていたとも感じている。

そして、探検を通して得たことをもとに、子供たちが感じた庭園のステキなところを多くの人に知ってもらうために、11月の「おく山まつり」での展示ブースを出展することになった。その準備に向けて、A児はB児とともに表現する活動へと進んでいった。A児は同じ場所に興味をもって活動してきたB児と相談しながら、自分たちの思いの実現に向けて制作活動に没頭していた(図2)。

A児一人ではここまでには至らなかったかもしれないが、B児とともに協働しながら活動できたことが、結果的にA児個人の思いの実現にもつながった大きな原動力になったと考えている。3・4回目の探検から制作活動にかけて、B児とともに活動をしたことを通して、A児が「②他者と協働しながらA児自身の学習プロジェクトや学習過程を計画する一人一人にカスタマイズされた学習環境」を整えることができたのではないかと考える。制作活動を通して以下のように振り返りながら、自分たちが表現したいことを実現するために黙々と制作を進めていった。

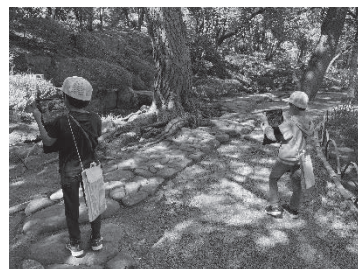


図1 庭園を探検するA児とB児



図2 庭園の木を制作するA児とB

【活動後のA児の振り返り】

- (10/23) 色々考えて決まったのが、ポスターに決めた。決められてとてもよかったと思う。次の時間には、工作したりして、おく山まつりの準備を頑張ってどんどん進めていきたい。
- (10/25) リアルな木と葉っぱを作った。葉っぱはとても難しかった。次はポスターと石を作りたい。
- (10/28) 木があり、それに葉っぱをくっつけることと、岩を1つだけ作った。次は、ポスターと岩などを作りたい。また来週作るのが楽しみ。

制作活動が終わり、いよいよおく山まつりを迎えた。A児をはじめ他の子供たちも何度も和歌山城公園を探検し、自分の目で見たことや出会った人から教えてもらったことをもとに作ったものや考えた説明文、クイズなどを、来てくれた人に一生懸命説明していた。A児も実際に作った庭園のジオラマをお客さんに見てもらいながら、タブレット端末を使って作成した説明文やクイズを紹介する姿が見られた(図3)。単元末の振り返りからも、A児は和歌山城公園のことが好きになっただけではなく、大人数の前で発表することが得意でなかったが、堂々と話せるようになったことを自分の成長を実感することができていた。

【単元末のA児の振り返り】

おく山まつりなどで発表することをゴールに頑張ってやってきて、木が倒れて立たなかった時、葉っぱがなかなか完成しなくて大変だった時など、いろんな大変なハプニングを越えながらゴールに向かって頑張ってきた。そこで、私は一つ大きな一歩を踏み出せるようになった。それは、まだ1年生から2年生になったばかりの時、大人数がいる中で発表ができなかった。でも、おく山まつりなどで大人数が来た時にも、自分ができるようになった！そんなことがいっぱいあるといいなと思う。和歌山城の観光客が多くなりますように！

さらに、A児は単元終了後も自ら家族と和歌山城公園へ何度も出かけ、庭園を散歩したりきれいな紅葉をスケッチしたりして、それを朝の会で発表する姿も何度も見られた。A児は和歌山城公園のことを本当に好きになり、それを自ら主体的にみんなに自信をもって表現できる姿がとても印象的であった(図4)。



図3 庭園について説明するA児



図4 朝の会で公園に行ったことを説明するA児

7. 3. 考察とまとめ

生徒エージェンシーの発揮につながるような姿を生み出していくために、子供たちが身近な人々や社会及び自然と繰り返し関わる中でそれらに没頭したり、好きになったりするなど、生活科の本質を実現する学びとなるよう、特に3つのしかけを講じて単元を展開してきた。本実践では、抽出児としてA児の学びを追ってきたが、A児以外の子供たちも同じように単元内で講じた3つのしかけが効果的に働き、何度も探検に行くうちに自分が調べている場所のことを他の場所の子供たちよりも自信をもって話す姿が顕著に見られたり、同じ場所を調べていた子供同士で協力しながら天守閣や御橋廊下、伏虎像などを制作したり、クイズや説明のポスターなどを作ったりする姿が自然と見られたりするようになった。

単元を通して探検を何度も設定し、最初は探検場所や細かな目的や視点を定めずに探検した。子供たち一人一人が興味・関心を示したところで、次は明確なめあてや視点を定めようとして、自分が調べたいことを調べた。それらが次の学びへつながっていったと考えている。対象と関わる機会、本実践では和歌山城公園でのフィールドワークを通して、学び続けることに対して子供たちの心に火が付き、学びに向かう力が持続していったと実感している。

また、本単元が終わった後も朝の会で和歌山城公園に行ったことを紹介するA児の姿や、その後の秋を楽しむ単元でも、子供たちから和歌山城公園に行き秋を楽しみたいという思いが出され、その後の学びにつながったことなど、学習以外の生活や次の単元へも本単元の学びがにつながるなどの波及効果が大きいものとなったことも成果として捉えている。2年生なりのモチベーションを維持しながら、本単元の活動を通してウェルビーイングを目指そうとする姿が見られたと感じている。

今後も生徒エージェンシーの発揮に向けて、生活科の本質に迫る単元の学びの充実を目指し、そのためにはどのようなしかけが効果的なのか、研究を深めていきたい。

参考文献

- ・吉富芳正, 田村学 (2014) 『新教科誕生の軌跡』 東洋館出版社
- ・千々布敏弥 (2021) 『先生たちのリフレクション』 教育開発研究所
- ・野田敦敬, 田村学 (2021) 『学習指導要領の未来』 学事出版